

工藤篤子メールマガジン 7号 2002.4.12

●大阪カテドラル・リサイタル報告



どうか、神が私たちをあわれみ、祝福し、御顔を
私たちの上に照り輝かしてください。

それは、あなたの道が地の上に、
あなたのみ救いが

すべての国々の間に知られるためです。（詩篇67：1、2）

主の御名をほめたたえます。



メルマガ受信者のみなさん、

4月8日の大阪カテドラルのコンサート「カンシオン・サクラ（聖なる歌）」のためにお祈りくださり、ほんとうにありがとうございました！

おかげさまで、大きな祝福のうちにコンサートを終えることができました。今回の恵みを、みなさんにお分かちさせていただきたいと思います。

霊的戦い

私は一週間前から咽頭炎になりました。お医者様から抗生物質をいただきましたが、飲むとお腹の調子が悪くなって大変でした。それに加えてまたコンサートの細かいたくさんのおーガナイズのことで気が散って、3日前には曲をさらっても心がこもらなくなりました。その日、私は熊の夢を見たのです。大きな熊が家の中に入ってきました。私は心の中では怖くて怖くてしょうがないのですが、神様がいるから大丈夫と母に言いながら、自分にもそう言い聞かせているのです。朝、目がさめて、これは敵の攻撃なのかも知れないと思いました。そして、もし私がいつも主の聖所にいさえいれば、決してサタンに足場を与えるようなことにはならないと思いました。それから忙しい中にも一日に何度も主からみことばを聴きました。特に詩篇の賛美は私の心をいつも主に向かわせてくれました。その中で心に留まったのが上記の詩篇の67篇のみことばです。私たちが主を見上げてこの奉仕を進めるなら、私たちは主のご栄光を現すことができるのだと思いました。（Ⅱコリント3：16、18）それは主のみ救いがすべての国々の間に知られるためです。そのために、私たちはこのリサイタルを企画したのです。また3月1日の札幌のリサイタルで、私が弱いときに働いてくださった主の恵みを思い起こしました。私は弱くてよいのだと思ったらのどの心配もなくなりました。

またコロサイ3章1節を静聴しました。ここを読むといつもこころの目が天に向かいます。

こういうわけで、もしあなたがたが、キリストとともによみがえらされたのなら、上にあるものを求めなさい。そこにはキリストが、神の右に座をしめておられます。

このように、イエス様の勝利を信じ、感謝しながら当日のコンサートに臨むことができました。

650名の来場者数

650人の来場者で、カテドラルの長椅子は一杯になりました。願っていた1000人は達成できませんでした。数日前のチケットの売り上げ状況が500名ほどと分かった時にはちょっとがっかりしましたが、実際には、一つのリサイタルで500名集めるのは容易なことではないことも事実です。そして来場者も主が

備えてくださり、GOAL2002への献金も主が備えてくださるものと受け止めることができたとき、たくさんの方々のご協力でチケットが売れたことに感謝しました。当日650名の来場でカテドラルの長椅子の全部が一杯になり、当日準備する予定ではなかった補助椅子を50席ほど出しました。そして来場者の半数以上はノンクリスチャンでした。よき伝道の間とすることができたことを心から感謝しています。

お天気が守られたこと

天候が守られました。当日は天気予報が雨でしたのに、朝、目覚めると、何と素晴らしい晴天。気温もかなり高くなりました。お陰様で、冷たい石造りのカテドラルの中が結構暖かくなりました。また雨が降らなかったのも、濡れると滑る恐れがあった、傾斜しているカテドラルの床も大丈夫でした。

素晴らしい共演者

このコンサートでは二人の素晴らしい共演者と共に演奏することができました。

一部でオルガン伴奏してくださった上野静江さんは、カテドラルの神父さんたちが、「あれは使えませんよ。」とおっしゃっていたオルガンを鳴らしたのです。出ない音もあり、鍵盤の立ち上がりも遅い（弾いてから少し後になってから音が出てくる）パイプオルガンを、何度もカテドラルに通って、弾き方、曲によって使用するストップパーをいろいろ考えてくださいました。そして鍵盤の立ち上がりの遅いことを想定して、私の歌の呼吸より先々に弾いてくれたので、音が鳴ったときと歌のフレーズがぴったりと合いました。さすが世界のオルガンを弾いてきた上野さんです。あのオルガンを知っているカテドラルの方は、彼女の演奏を聴いてきっとびっくりなさったのではないかと思います。

二部でピアノ伴奏をしてくださった藤井由美さんは実に素晴らしいピアニストでした。そしてスペイン歌曲を驚くほどよく理解して弾いてくださいました。最初の練習の日からぴったりとついてきてくれたので驚きました。彼女はスペイン語を解さないのですが、スペイン語の意味がすべて分かるようになるまで楽譜を勉強してくださいました。謙遜な姿勢の方です。彼女には学ぶことが多々ありました。日本ではなかなかこのような伴奏者に会えなかったのも、今回藤井さんと共演できて感激いたしました。けれども彼女はまだクリスチャンではありません。どうぞ彼女の救いのためにお祈りください。

素晴らしい同労者たち

このコンサートの企画が始まって依頼、関西世話人の皆さんはまるで出演者自身であるかのように良く働いてくださいました。（黒田牧師夫妻、中川さん、田中さん、近藤さん、青木さん、大西さん、土田先生）ジョシュと彼のお友達、それに広瀬さん、お昼に、祭壇を置いてある30いくつもの重たい台を移動してくれました。その後3人ともフラフラになったそうです。

PAの広瀬さんと録音の新谷さんは早くからセッティングをしてくださりました。

プロのアナウンサーである清水さんが、コンサートのアナウンスに花を添えてくださいました。

また、関西VIPの今井さんは進行係の指揮を執ってくださいました。

看板から謝礼の封筒書きに至るまでしてくださった辻本さん、心配して早くから来て手伝ってくださった浜浦さんと華子先生、病人が出たときのためにと待機してくださった湯川胃腸病院のスタッフの皆さんと持田夫人、それから高校時代の担任の先生までお手伝いに駆け出してくださった野村さん、写真撮影してくださった、本職はアートディレクターの比嘉さん、リカさん始めIBCの皆さん、最後にまた重たい台をもとに位置にもどしてくださった20数名のみなさん、金子ご夫妻、ほんとうに、ほんとうにありがとうございました。（もしも漏れている方がいたらお許しください）

ちょっと余談(シスターとの会話)

今回、このコンサートをカトリック教会でするということで反発を感じたクリスチャンの方もいらっしゃるかもしれません。けれども私は、ここ数年ヨーロッパのカトリック教会とプロテスタント教会を見てきたとき、どちらにも真の信者がおり、どちらにも偽のクリスチャンはいるのだ、ということを確認してまいりました。派にかかわらず、真に主を求める者を、神は救ってくださることを見てまいりました。そのような話しをカテドラルのシスターとさせていただきました。そうしましたら、彼女も全く同じように見ている、とのです。そして、カトリック教会の歴史の中で犯して来た罪、神学の見直しなどについて話してくれました。私も特にドイツのプロテスタント教会の犯してきた間違いなどを認識していましたから、そのことを話しました。そしてお互いに真実な信仰を求めなければいけないこと、御霊に生きること、そして許し合い、和解することの大切さについて話しました。そして世界伝道について、これからの展望などについて話しました。心燃えるひとときでした。

最後に

すべてを整え導いてくださった神様にここから感謝いたします。

私はこのコンサートを主が伝道のために用いてくださることを願っています。当日、あのコンサートを聴いて、主にお出会いした人があったかどうかについては分かりません。でも主がああ場で主の御名を宣べ伝えさせてくださいました。ですから来てくださった方々が、主の救いを求める一つのきっかけとなりますように祈っています。また3月1日の札幌でのコンサートの話ですが、未だに反響があり、以来、主を証しさせていただくチャンスが続いています。自分では失敗と思ったコンサートでしたのに、主のみ業はほんとうに不思議です。そのように、今回のコンサートもなんらかの形でこれからの伝道につながられますことを願っています。

お祈りください

4月13日、IBC(インターナショナル・バイブル・チャーチ、大阪)の開所式でLALO(バイオリンとピアノのデュオ)と賛美いたします。祝された会となりますようお祈りください。

またこれから新しいCD録音を予定していますが、スタジオ工事、オーガナイズ等の面でちょっと難航しています。お祈りください。

主の祝福が皆様とともにありますように。

感謝をこめて

工藤篤子